

## “日労”系指導者の戦後と『社会思潮』<sup>(3)</sup>

松井政吉氏に聞く

はじめに

- 1 戦前期の活動と日本労農党
  - (1) 戦前期の活動
  - (2) 日労党の理念と指導者（以上、第470号）
  - (3) 戦時体制の成立と三輪寿壮
- 2 日本社会党の結成と“日労”系の指導者
  - (1) “日労”系指導者の公職追放（以上、第472号）
  - (2) “日労”系の結集と社会経済研究会
  - (3) 日本政治経済研究所の設立（以上、本号）
- 3 『社会思潮』の創刊と編集

### (2) “日労”系の結集と 社会経済研究会

“日労”系の“溜まり場”

松井 さて、次の質問に移ろう。僕は、社会経済研究会については丸の内の日本交通公社4階で行われていた研究会に出席していましたから、記憶があります。しかし日本政治経済研究所については佐野学が所長で、日労系では菊川忠雄さんが一枚からんでいたということ以外、記憶がほとんど残っていない。

あなたの手紙では、この二つに社会思潮社を加えた三つは、日労系の“溜まり場”になっていて、事実上“派閥組織”だったという。いずれも日労系の連中が多く集っていたことは確か

だと思います。とくに丸岡尚さんが経営していた社会思潮社なんかは、水長（水谷長三郎）が『社会思潮』の主幹となっていたけれども、日労系の連中が編集委員となって機関誌を発行していたのです。しかしこれらの研究的団体や丸岡さんの社会思潮社などが果たして“派閥組織”であったのか、僕は疑問に思います。これらは“派閥組織”でないですよ。

日本社会党が結成されたのち、旧日労系の方々が連絡を取り合って運動方針や政策問題を協議したり、まとまって行動するということはなかったのですか。

松井 ありましたよ。堂々とはなかったと思うけれども、ありました。たとえば森戸辰男さんが政務調査会の会長のとき、それらの会合に日労系の連中が気軽に集っていました。さら

に、日労系の連中は何か連絡事項があれば、牛込（新宿区）の河上丈太郎さんの邸宅によく集まっていました。日本交通公社の4階にも誰かの事務所がありましたから、いくらでも意思疎通や協議を行うことができましたはずです。社会党では日労系の公職追放者が一番多い。けれどもそのため日労系が戦後、バラバラに分解してしまったというわけではないのです。

### 左派と“五月会”

松井 鈴木茂三郎さんを総帥とする左派は昭和22年5月“五月会”を結成しています。これははっきとして派閥組織です。これは、翌22年4月の戦後2回目の総選挙や同じ月の参議院選挙で当選した左派系の議員が総結集したもののなんです。そして“五月会”は当時、石炭国管や中労委決定の公務員に対する2・8給付金支給の問題や、野溝勝さんの農相実現などでかなり組織的に動き回っていました。

左派はこのほか、これも鈴木さんが所長となって、党の外に社会主義政治経済研究所（1946年1月25日設立）を設立し、大内兵衛、向坂逸郎、有沢広巳先生らの教授グループの協力を得て政策研究をしていました。この研究所も、日比谷公園内の市政会館に事務所を置いて活発に活動していたのです。

左派は派閥をつくり、文字通り党の内と外に有力な“溜まり場”をもっていました。日労系の連中はあの頃、冷たい目にさらされ、党内において“五月会”のような形でのまとまりはなかったはず。“五月会”は、京橋3丁目のビル（篠塚ビル）に事務局を構え、専従の事務局員をおき、新聞なんかも出していたのです。新聞を出していたとはすごい。

新聞とは『五月会ニュース』（1948年1月1日創刊）のことでしょうか。

松井 そうい名称だったかな。左派は鈴木

さんを総帥に、がっちり固まっていたのです。他方、右派は右派で“溜まり場”があったのです。片山哲さんは自分の法律事務所をもっていました。西尾末広も平野力三も、新橋の党本部のすぐ近くの蔵前工業会館に事務所があり、水長も山水社という出版社を拠点にして動いていました。

日労系の場合は当時、森戸辰男さんを中心として浅沼稻次郎、松本淳三、細野三千雄、加藤鎌造さんなど議席をもつ連中が指導部をつくってまとまっていたと思います。しかし森戸さんは間もなく片山内閣で文部大臣となり、党の政務調査会の会長を辞めています。浅沼も病気になるって“人間機関車”というわけには行かなかった。とにかく日労系は大御所の杉山元治郎先生をはじめ、三輪寿壮、河上丈太郎、河野密のいわゆる“日労党三羽ガラス”、さらに三宅正一、田原春次、川俣清音までも公職追放を受けたことで、まあ動揺を来し、まとまりが弱かったのです。

### 社会経済研究会の発足

ところで、社会経済研究会の正式な発足は、1946年9月、日本社会党第2回全国大会の直前あたりでしょうか。

松井 いや、もっと早い。昭和21年4月半ばです。なぜ記憶しているかというと、僕は当時、党の福島県連の書記長で、その4月の戦後最初の総選挙に福島3区から立候補したけれども落選したのです。僕が、このことの報告や、福島県連の党務報告を行うため上京したのが選挙が終わって1週間くらい後なんです。そして用事が済み、三輪先生に挨拶して帰ろうと有楽町の国策パルプビル内の法律事務所を訪ねたさい、先生から直接、研究会が発足したことを聞きました。

社会経済研究会は日労系が主体でした。メン

パーとしては松本淳三、加藤録造、井上良二、永江一夫、細野三千雄、松沢兼人、前田栄之助、のち民社党の委員長となった西村栄一も出席していました。森戸辰男さんや水長もメンバーでした。さらに、平野（力三）さんは出席していませんが、平野派の佐竹晴記や田中健吉らも時折、顔を出していました。これらは代議士です。このほか僕や、当時、三重県連の書記長でもあった丸岡尚さんなど、党の地方幹部が何人が加わっていたのです。

社会経済研究会の代表はどなたですか。

松井 森戸さんが名目の代表だったのかな。三輪、河上、河野の三人は出席を遠慮していました。僕は、細野三千雄さんか松沢兼人さんのいずれかだったと思います。研究会の案内や連絡はたいてい細野さんか松沢さんの名前で来ていました。どちらかといえば細野さんからの連絡の方が多く、また僕が都合で欠席するさいは細野さんに手紙を出していましたので、細野さんが研究会の代表か、あるいは事務局長的な存在であったことは確かです。

細野さんは、三輪先生と同じ弁護士です。東京帝大の新人会の同志でもあり、肝胆相照らす仲にありました。細野さんは、社会思想社の結成や日労党の結成など生涯にわたって先生と活動を共にされ、僕が妬けるほど二人は仲が良かったのです。だから、いまふと頭に浮かんだのですが、細野さんが三輪先生ら三人と連絡をとり、あるいは三人の意向を受けて研究会を運営していた可能性があります。細野さんは、まことに誠実かつ几帳面な方で、日労系の人たちの信頼は絶大だったのです。

さて、社会経済研究会はそもそも、社会党のあり方や政策・方針をさまざまな角度から検討してより良いものにしていこう、という目的で生まれたのです。要するに勉強会なんです。基

本はこの点にありました。研究会が開かれたときの講師に東大の大河内一男先生や、三池炭鉱の争議で中労委の会長として斡旋の労をとった慶応大学の藤林敬三先生、かつて社会思想社で三輪先生と一緒にだったという平貞蔵先生や、当時、朝日新聞社の論説主幹をされていた嘉治隆一さん、のちにお茶の水女子大の学長になられた蛭山政道先生などに来ていただいて、持株会社の整理（財閥解体）、日本経済の再建、農地改革、独禁法制定の問題を研究しました。森戸さんも1回だけ、憲法改正の骨子について話されたことがあります。だからあなたからの手紙に研究会が“日労系の最初の派閥組織”と書いてありましたけれども、左派の“五月会”のような組織では決してないのです。この点、はっきりと申し上げておきたい。

#### 社会経済研究所との関係

わかりました。撤回いたします。ところで1927（昭和2）年7月に、社会経済研究所という民間の調査研究機関が設立されています。この研究所は事実上、日本労農党のシンクタンクだったようで、財閥の資本構成、労働者の賃金や生活状態、労働争議、さらに農村・農事情などについて調査研究を行い、その成果を日本労農党の実際の運動に活かしておりました。

研究所の運営は高野岩三郎氏や三輪寿壮氏、さらに細野三千雄氏らが経営委員に就任してこれを担い、主任は丸岡重堯氏でした。丸岡重堯氏はもと大原社研の研究員で、当時、東洋経済新報社の編集主幹の職にありましたけれども、これを辞めて研究所の運営にあたっていたようです。奥様は2、3年前に亡くなりました評論家の丸岡秀子さんで、松井さんが、先ほど社会経済研究会のメンバーの一人として挙げられた丸岡尚氏は重堯氏の実弟で

した。

松井 おう。

とても気になっていることがあります。社会経済研究会は、この社会経済研究所を継承しているのでしょうか。

松井 名称が似ていることも、考えてみれば不思議なことです。社会経済研究会について僕は三輪先生から発足の経緯など一切、聞いていません。これは関連するのかわからないが、外部から招いた講師には三輪先生もかつてメンバーであった社会思想社の出身の先生方が多かったような気がします。細野三千雄さんは、平貞蔵先生や河野密らと社会思想社の発起人に名をつらねていた方だ、と河野から聞いた記憶があります。

#### “日労”系指導者の特徴

松井 ついでにこのことも紹介しておきます。日労系の指導者における特徴は、インテリが多い。“日労党三羽ガラス”の三輪、河上、河野は第一高等学校、東京帝大の独法科の卒業で、このコースは当時、日本では最高のエリートコースでした。とりわけ官界では優位にあって、当時官庁の官庁だった内務省や、大蔵省、司法省など国家運営の中枢を担う役人はたいていこのコースなんです。

三輪先生は、昭和25年10月に公職追放を解かれ、正式に社会党に入党されました。先生は財界や官界において絶大な信頼があり、社会党の理知派で、党にとってはもう大変な宝だったのです。岸（信介）さんは自由党の幹事長時代に、“日本に自・社の二大政党制が生まれ、社会党が政権をとっても三輪がいるかぎり何ら心配することはない”と周囲に語っていたのです。先生が政界に復帰したのは昭和27年10月、第25回総選挙に当選してからです。大蔵省などの官僚も三輪先生の当選を大変喜び、第一高等学校

や東京帝大時代の後輩なんだろう、局長連中が法律事務所や党の控室によく訪ねて来ていました。

これは僕が勝手に考えていることです。日本で最初の十字架宰相となった片山哲さんは、人格高潔で、理想肌の政治家だったと思います。河上丈太郎さんも“十字架委員長”と呼ばれたように、タイプは同じです。ところが社会党において、政・財・官界からその人格識見や政策家として絶大な評価・信用を得ていたのは、三輪先生ともう一人、和田博雄さんの二人だったと思います。和田さんは吉田茂が第1次内閣をつくるき三顧の礼をもって農林大臣に迎えられた方で、次の片山内閣でも国務大臣・経済安定本部総務長官として日本経済の再建に尽くされました。

僕は、社会党における不幸の一つは森戸辰男さん、三輪先生、和田博雄さんなどの政策家が、あるいは哲学をもつ理知派の政治家が、党内においてきちんと評価されず、最高指導者として出番を与えられなかったことにあると思っています。森戸さんは“森戸・稲村論争”で疲れ、また社会党のごたごたに愛想をつかし、芦田内閣が総辞職した翌年ぐらいに広島大学の学長に転身されました。三輪先生は、森戸さんの離党に大きな衝撃を受けたようです。

三輪先生は東京帝大時代に、当時、人気講座であった経済学部の森戸先生の講義を聴いていたそうです。三輪先生はそれ以来、森戸さんの指導を受け、親交を深めておられたとのこと。森戸さんが、社会党が結党の理念から大きくずれ、マルクス主義的な階級政党へ偏向したとして離党を表明したとき、三輪先生は“これで党の屋台骨の一つが抜けてしまったな”と肩を落としていました。

さて、日労系はインテリが多いという件、麻生久、細野三千雄、松沢兼人、菊川忠雄さんな

いずれも東京帝大の出身でした。しかも三輪、河上、河野の3人を含め、全員が在学中は新人会に入っていました。

さらに、日労系におけるもう一つの系譜として、早大を卒業した人が多かったのです。浅沼稲次郎、三宅正一、田原春次、川俣清音などがそうです。彼らも全員、在学中は建設者同盟に入っていました。

だから、日労系の指導者は、東京帝大の新人会と早大の建設者同盟の活動の経歴をもつ人が主体であったのです。先生が亡くなったのち“三輪会”の会合に出席しますと、鬼籍に入った新人会のかつての同志の思い出が語られるのが常でした。“浅沼を偲ぶ会”に出ても、かつての建設者同盟の連中のことが追憶していました。“三輪会”も“浅沼を偲ぶ会”も現在はなく、寂しいかぎりです。

日労系の指導者はみな聡明で、学者としても第一級でした。三輪先生や河野も戦前の一時期、活動のかたわら大学で教鞭をとっていました。河上さんと松沢兼人さんは関学(関西学院大学)の教授を辞めて、日労党の運動に参加したのです。河野は“理論なき行動は成功しない”といっ、社会民主主義の理論や政策研究の重要性を事あるごとに提案していました。社会党の結成を準備する会合で、党の機構として政策委員会(のち政務調査会)の設置を第一に提案していたのが、河野密と田原春次だったのです。僕は、社会経済研究会も、日労系の議員における政策重視のスタンスから生まれたのだろう、と思っ、ているのです。

#### 片山内閣と三輪寿壮

松井 片山内閣の労働大臣であった米窪満亮さんが生前、社会党が次の芦田内閣に参加したことは筋が通らず、決定的な間違いであったと語っておられたことは先に紹介しました。僕も

そう思うのです。片山内閣の瓦解の根源は、保守との連立それ自体にあったと思います。社会党はこの失敗に学び、下野すべきでした。すなわち完全野党の立場を貫くべきでした。これがけじめというものです。そして、社会党はこんどこそ政局運営や政策立案に党の独自性を発揮できるように、単独政権の樹立へ向けて主体性を強めるよう努力すべきだったのです。

三輪先生は米窪さんよりもっと厳しく、社会党が首班内閣をつくったこと自体、過ちであったと考えておりました。

社会党が昭和21年4月、戦後最初の総選挙で大きく躍進して第3党になったとき、三輪先生は大変喜ばれました。第3党といっても93議席で、第2党の進歩党とは1議席少ないだけだったのです。そして、僕が本部への党務報告の帰途、有楽町の事務所に先生を訪ねたとき、先生は、“いずれ社会党は第一党になるよ。これからがほんとうの正念場なんだ。党は結束を強め、組織基盤を広げ、政策力を高めなければならない”と熱っぽく語っていました。

実際、社会党は翌22年4月の総選挙において143議席を得、自由党を抑えて第一党となったのです。僕らは勝利に沸き返りました。それは当然です。労農市民の政党、社会主義を標榜する政党が議会で第一党となったのは日本の歴史上、初めてなんだもの。新橋の党の本部には連日、新聞記者や日映のニュースカメラマンがわんさと押しかけて来て、猛烈な取材合戦が始まりました。ところが三輪先生は喜ぶどころか、内閣をつくらないで済む策はないものかと大変悩んでおられたのです。

どうしてです？ 第一党が政権を担当するのは憲政の常道じゃないでしょうか。

松井 うん、それはそうなんです。けれども三輪先生はあのときは心底、社会党はいまは政権を執るべきじゃない、政権参加が不可避な事

態でも首班内閣だけは辞退すべきだ、と考えていました。先生は生前、社会党の過ちの最大のもの不用意に政権を担当したことにあり、党内における対立も混乱も“野党ボケ”も、すべて片山内閣の組閣と瓦解に端を発していた、と語っていました。

三輪先生は社会党の脆さを承知していました。社会党は結党してまだ1年と少ししか経っていない。党内の結束も出来ていなければ、党の機構も支部組織も整っていない。さらに決定的だったのは、社会党は当時、日本再建のための総合政策を立てていなかったのです。

社会党は、総選挙にあたってそれなりの公約を掲げ、救国のための政策を発表しましたが、確信のある政策を党内における論議を踏まえて、党全体の結集した力によってこれを打ち立てていなかったのです。社会党は何もかもにわかづくりでした。政権党としての決意や政策をもたぬまま政権を託されるくらい、国民や政治に対して無責任なものはない。先生は、“ここは焦っちゃいけない。党内における結束を強め、組織と政策を確立し、新しい日本国家を担う政党としての主体的条件を構築することが何よりも大事なんだ”と先生は心底から思っておられたのです。

片山内閣の誕生は早過ぎたのでしょうか。

松井 うん、そういう面はあったらう。態勢が十分に整わないうち無理に土俵に押し上げられた、という感じがあります。当時、党内は勝利に沸き返り、国民も清廉潔癖な片山首相の誕生を待望していました。片山さん自身、“第一党の社会党が政権を担うのは憲政の常道であり、首班内閣で臨みたい”と記者会見で述べていたのです。“グズ哲”と異名され、いつも沈着冷静な片山さんが、西尾末広さん以上に興奮していた感じでしたよ。

西尾さんの本質はリアリスト、保守の連中も恐れるほどの現実政治家なんです。西尾さんは三輪先生とある部分では共通するところがありました。西尾さんも連立論者でしたけれども、首班内閣でなくてもよいという考え、つまり社会党から首相を出さなくても構わない、という考えでした。まずは連立政権を樹立し、政権の一翼を担うことに社会党の成長・発展の第一歩がある、と考えていた節があります。

三輪先生も現実政策家です。けれども西尾さんと違うところは、片山さんとは違う意味での理想家肌の持ち主なんです。先生は“完結型の政治家”といったらよいのかな、先生はフェビアン主義者なのですが、先生がめざす政党の理想型は英国労働党がモデルとなっていて、社会主義という大義、合理的な政党組織と運営、体系的かつ総合的な政策の構築、この三つを同時に兼ね備えたものでした。

この点から見れば、片山内閣は時期尚早であり、社会党自体、政権党としての条件を満たしていない、と映ったに違いない。党の結束が弱く、組織も弱体で、何よりも政策の確立もないまま政権に参加することはむしろ日本国民に対して無責任であり、社会党のためにも避けるべきで、結果として国民の信頼に応えるものではない、ということにあったと思います。先生は、あの躍進が、党の実力によって裏付けられたものでなく、あるいは国民から立党の理念や政策が高く評価されての結果というよりは、むしろそれまでの軍国主義に対する批判や新しい政治を待望する、いわば“時代の風”を受けての躍進であって、社会党はこれを実力と錯覚してしまったところに不幸があったのだろう、と述懐していたこともありました。

### (3) 日本政治経済研究所の設立

#### “日労”系との関係

片山内閣が誕生したのと同じ1947年6月に、日本政治経済研究所が設立されました。日労系の方々が研究所と関係があったことはどうも確かなようですが、松井さんは何か関係はあったのですか。

松井 一切関係していない。僕が知っているのは佐野学が所長で、日労系では菊川忠雄さんが一枚からんでいたらしい、ということだけなんです。佐野学が所長であったということ自体、僕自身、これを誰から聞いたのか記憶していないのです。ところで、研究所はどこにあったのだろう。

これ(日本政治経済研究所の機関誌『会員研究討論資料』1947年9月4日)によれば、住所は千代田区永田町2丁目5番地となっています。

松井 昔の永田町2丁目5番地といえば、この(現在の社会民主党本部)辺りですよ。研究所はもしかしたら、どなたか社会党代議士の事務所を間借りしていたのかもしれない。所員名簿といったようなものはあるんですか。

いいえ、『三輪寿壯の生涯』(三輪寿壯伝記刊行会編、1966年)や『河上丈太郎』(河上前委員長記念出版委員会編、1966年)など、旧日労系の指導者の文献を調べましたが、研究所については一切言及されていないのです。国立国会図書館の『浅沼稻次郎関係文書目録(稿)』(1971年)にも目を通したのですが、研究所に関する資料などは無いようです。

しかし今回、一つだけ興味深い資料を見つけました。それは、「首切、賃下げ参謀本部『日本政治経済研究所』設立さる」と題する、人民社の雑誌『真相』(第11号、1947年9月

号)の短い暴露記事なんです。この記事によれば、研究所は、加藤録造、永江一夫、松本淳三、浅沼稻次郎、菊川忠雄氏らが世話人となって設立されたようです。これがそのコピーです。

松井 加藤録造さんはじめ、ここで世話人に挙げられている方々は間違いなく日労系の連中です。やはり菊川さんの名前が出ていますね。菊川さんはどういう経緯で佐野学と組んだのだろう。加藤さんと松本淳三さんはとても仲が良く、一緒に入った可能性があります。しかし永江さんが世話人として名前が出ていることは多少、奇異に感じます。永江さんは民族派じゃない。永江さんは片山内閣のとき森戸先生を補佐するため文部政務次官を務め、芦田内閣では農林大臣となっていますが、むしろリベラリストなんです。

三輪先生の名前はここには出て来ないが、先生が、佐野学の研究所に関係していたということは僕は承知していないし、実際にもないと思うんだ…。先生は、公職追放に指定されてからは、昭和電工事件で捕まった西尾末広さんの弁護人を引き受けるなど弁護士活動に専念され、時たま社会思潮社(日本社会党の機関誌『社会思潮』の発行所)に顔を出すくらいで、活動の幅はなかったのです。

さらに興味深いことに、研究所設立の世話人として東京大学の矢部貞治、大河内一男両先生や、戦時における新官僚のリーダーの一人で、東条内閣のときの軍需省軍需動員局長だった美濃部洋次氏らも名を連ねています。

松井 いま、思い出したことがあります。三輪先生は、佐野学とは東京帝大で1、2年後輩にあたり、新人会でも同じだったようです。三輪先生は、新人会では麻生(久)さんの指導を受けていたといわれ、佐野学はその麻生さんと協

力して新人会を結成した、その創立メンバーだったのです。

この点は、とても不思議なことなんです。新人会の連中は生涯にわたって、のち右翼に転向しても左翼に傾斜しても、かつての同志としての絆というか、心の繋がりみたいなものを生涯持ち続けていたようです。佐野学は、日本共産党の大幹部という経歴の持ち主です。彼は検挙され、のち獄中において鍋山貞親と転向を声明しました。三輪先生は佐野学の主任弁護士として誠心誠意、弁護をしていたようです。だから二人が、交流というか、何らかの接触があったことは十分に考えられるわけで、先生が、そうした延長線上において研究所に関係した可能性があります。

もう一つ、東京大学の矢部貞治先生や大河内一男先生が研究所に関係しているという件ですが、これも考えられることです。日支事変（日中戦争）の前年の昭和11年6月、国策研究会が結成されました。国策研究会は、2・26事件ののち広田弘毅内閣が誕生し、戦時体制をどう構築するのかという国家のあり方が提起される中で、代議士連中が集まって超党派の勉強会という形で結成されたのです。三輪先生や河野密など社会大衆党の代議士も、この国策研究会に参加していました。そしてその国策研究会に、社会政策学派の大河内先生なども呼ばれ、意見を述べていたとのことでした。

#### 研究所の目的と事業

『佐野学著作集』（刊行会編、1958年）によれば、日本政治経済研究所は、「日本的な社会主義の原理を築き、また日本復興の当面の政策を研究し、新しい政治勢力の結集に資する」（977頁）とその目的について述べています。

先ほど、鈴木茂三郎氏らの左派が派閥組織

として党内に“五月会”を結成し、党外にも社会主義政治経済研究所を設け、大内兵衛・向坂逸郎・有沢広巳先生など教授グループを結集して政策研究を試みていたという話がありました。僕は日本政治経済研究所について、日労系が社会主義経済研究所に対抗して設立した研究所と見ているのです。

松井 日本政治経済研究所について僕は、何も知らない。この記事に出ている世話人の名前から考えますと、これが事実とするならば、日労系の連中のうち何人かは研究所に関係しているようです。しかし社会経済研究会の例会でこの研究所について話題になったということは僕の記憶にはないし、三輪先生からも河野からも生前、一切聞いていないのです。

河上丈太郎さんが社会党の委員長時代、僕が総務局長を務め、この間、執務の合間や息抜きの雑談としていろいろなことが話題として上り、思い出を語り合いました。僕はこの間、河上さんから三輪先生の人柄や足跡についていろいろ教えてもらい、先生への理解を一層深めました。

僕は先ほど、政治家としての三輪先生について“日本社会党の宝”だとあなたに言いました。これは実は河上さんの言葉なんです。さらに河上さんは“社会党において三輪君よりも個々の点ですぐれた理論家、政策家、オルガナイザーはいるかもしれない。けれども、この三つを兼ね備えた“政治家”は彼をおいていないだろう。三輪君に党の委員長になってもらい、社会党を一回りも二回りも大きくしてほしかった”と、先生の早逝を大変惜しんでいました。

僕は河上さんから、このほかにもたくさんのお話を聞きました。また河上さんの妹は永江一夫さんの奥様になっています。永江さんが実際に研究所の世話人となっていたならば当然、話題となるはずですが、河上さんから、研究所

のことが話題になったという記憶はないのです。

日本政治経済研究所は果たして実態があったのだろうか。仮に研究所が設立されていても、名目的な存在だったのじゃないのかな。もし日本政治経済研究所が日労系の研究所として存在し、それなりに活動をしていたならば、誰かの記憶に残っていて話題に上ってくるはずです。いずれにしろ、僕は研究所については知らないのです。

日本政治経済研究所は約3年間くらい存続したようです。機関誌『研究会討論資料』(のち『会員研究討論資料』と改題)や『研究通信』などを見ますと、調査研究活動も広くかつ活発に行っていたようです。財閥解体や失業問題、経済安定本部の計画経済案に対する検討、世界経済の現状や戦後日本社会構造の分析、公務員法改正、賠償問題、外資導入問題、さらに日本労働運動や社会党をはじめとする政党分析や、ソ連の世界政策や東欧・中国の共産主義運動の動向についても検討を試み、旬刊ないし週刊で報告書を発行していました。

松井 三輪先生は、それらの雑誌に何か執筆していますか。

手元にあるものの中に三輪寿壮氏が執筆したものはありません。なお、機関誌のうち『研究通信』の場合は矢部貞治、高宮晋、佐野学氏らが編集主任となっています。

松井 日労系の連中はみな真面目で、学術的なんです。昔、全労党(全国労農大衆党)のときや、社民党(社会民衆党)と合同して社会大衆党となったのちも、日労系の連中は三、四人集まれば政策論議を始めていました。先ほど社会経済研究所のことが出ました。僕はこの研究

所については何も知らないのですが、恐らく戦前の無産政党において自前の研究所をもったのは日労党くらいだと思います。

こうした傾向は戦後においても変わらなかったわけです。まず、日労系の連中は社会経済研究会を結成して日本経済の再建など現下の問題についてみんなで研究しました。もしかしたら日本政治経済研究所も、コミンテルンの型ではなく、日本の特質にあった社会主義をどう構築するのか、という問題意識から設立したのかもしれない。“日労党三羽ガラス”がこの日本政治経済研究所にどう関与していたかは僕は知らないが、あなたの話を聞けば、日労系の何人かが関係したことは確実のようです。さらに三輪先生は公職追放中、“科学と政治の会”というごく内輪の研究会をもっていました。この会にも日労系の主な人は入っていました。

“科学と政治の会”とは、どういう会なんですか。

松井 要するに、政治の中に科学を取り入れなければならない、ということなんです。社会主義といっても、唯物論や階級闘争だけを金科玉条にしたものは政治として十全ではなく、心や精神・文化なども政治の中に要素として取り入れなければならない、というものでした。八木秀次、松前重義、篠原登さんなどが集っていましたが、この“科学と政治の会”は、松前さんと三輪先生が中心となって結成し運営していたのです。日労系の連中のうち三輪先生など指導的な幹部は、公職追放となって表立って政治活動が出来ない時代にこういう形で、すなわち学問研究や政策研究に精を出して、政治の舞台に復活する時期を待望していたのです。

(つづく)